

「自己紹介 生まれと育ち」

小 泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



はじめまして、小泉ひろみと申します。私は、昨年6月18日の秋田県医師会定例代議員会において、第16代秋田県医師会の会長に選定していただきました。

「あきた経済」のコラム執筆にあたり、最初ですので、まず自己紹介をしたいと思います。

私は秋田県秋田市に生まれました。父も母も医師でした。父は私の生まれた昭和30年に内科医院を開業しました。母は、子育てをしながら父の医院を手伝っていましたが、私が小学生の頃から祖父の精神科病院に勤務するようになりました。2人の兄も医師です。このように書きますと、すくすく育って医師になったようですが、両親から引き継いだ性格のせいからか、実際はそうではなかったかなと思います。

父は素直な表現をする方ではありませんでした。たとえば父はずっとアンチ巨人でしたが、江川投手がちょっとしたテクニクを使って巨人に入団して批判が出た時、父は「明日から巨人ファンになる」と言って、それ以来亡くなるまで巨人ファンでした。また、カイワレ大根事件（O-157集団感染の原因と言われ売れなくなった）の時には、「明日からカイワレ大根を食べるぞ」と言いました。母は、戦時中に帝国女子医専に入ったようなお嬢様でしたが、比較的だらかな人でした。

私は、2人の性格を半分ずつ持っていて、半分ずつ持っていないなと思っています。何を言いたいかといいますと、私も決して素直ではなかったということです。

小学生のころは、医師の家と見られることに負目を感じていました。獣医になりたいと思ったりもしましたが、途中からはなんとなく医師をめざしていました。中学校は、秋田大学附属中学校に行きましたが、土崎小学校からの受験組だったので、皆と早く仲間になりたかったのか、自分を笑ってもらうことを嬉しく思っていた気がします。高校時代は、さらに精神的に不安定な時期に入り、自分が何者なのか、生きる価値があるのか、などを考えていたように思います。自己否定などをする時期ですが、友人から「それこそが、自意識過剰」と言われ、自分を自分の人生の脇役にしてみたところ、気持ちが軽くなったのを覚えています。このようなことは、今の仕事の中で、子どもの気持ちを理解することに活きているのかもしれない。

大学は東京女子医大でした。国立大学の試験の前に合格した時に、親には申し訳ないですが、東京で過ごしてみたい気持ちが強くなりました。大学では様々な友人を得ました。

後に日本で初めてスイスの「国境なき医師団」に入った友人とは、ポーランド映画やスウェーデン映画を観ていました。ピアニストのポリニの、ショパンコンクール後初めての日本公演には何度も行きました。半年くらい学校にあまり行かず、呼び出しを受け、成績はどんどん下がりました。クラブは最初、水泳部、スキー部、山岳部に入りましたが、結局山岳部に残りました。登山用品や山へ行く費用がかかり、家庭教師のバイトをしていました。バンドを組んで、



ロックをやったりもしました。

将来の選択に影響したのが、友人が作った「障害児医療研究会」に参加したことでした。ダウン症や自閉症、一型糖尿病の子どもたちのキャンプに参加したり、施設で子どもと遊んだりしました。また、大学病院の小児科病棟で毎週子どもたちと遊んだりもしました。大学時代も、引き続き精神的に不安定でしたので、重い気持ちを抱えていたものの、なんとか病棟に行き子どもたちと遊ぶと、こちらの気持ちが軽くなったの覚えています。自分に合っているのだと思い、卒業後小児科に入局しました。

小児科入局後は、精神的にだんだん安定してきたように思います。たぶん、人に求められていることや、やるべきことがあるということが、メンタルを支えたのだと思います。先輩の先生のお話で、一番心に残り、今も大事に思っているのが「とにかく、仕事を続けなさい」という言葉でした。

様々なことがあり、いろいろなメンタリティーになります。重い気持ちを抱えてでも仕事に行けば、少しずつ元気になりました。もちろん、仕事のストレスもありますが、愚痴を言い合える仲間がいたことも良かったと思います。その後、怪我をしたり、病気をしたりで長く仕事を休むことが何回かありました。秋田に本格的に帰郷したのは、平成4年です。怪我や入院で、何度も老いた母に上京してもらったのが申し訳ない気持ちになったからです。

市立秋田総合病院には、平成5年から令和元年まで勤務しました。公務員でもあり、勤務医でもあり、制約もいろいろありましたが、今はそれも勉強になったと思っています。

平成11年、私の前任の島田科長が退職されることになり、小児科長になりました。この時、考えたのが「自分1人では小児科を運営できな

い」ということでした。そこで「まかせる」「待つ」「ほめる」「感謝する」とメモ帳に書いたのを覚えています。そして、「1人1人の医師にサブスペシャリティを持ってもらう」ということを考えました。

任せてみると、皆、しっかりやってくださり、私が思っていた以上の展開をみせてくれたのは、嬉しいことでした。

そして令和元年9月に「秋田こどもの心と発達クリニック」を開業しました。東京女子医大での私の小児科の中のサブスペシャリティは、主に小児神経医療でした。また大学時代からの流れで、児童精神医療もかじっていました。その後女子医大に母子医療センターが創設され、新生児医療に没頭しました。一生していても良いと思ったくらいでした。しかし、新生児医療の特徴として、集約した方が治療成績もよいため、センター機能を持つ病院以外での新生児医療は限定的で、その後児童精神科領域の診療が私の主になりました。その中で、一緒に働いてくれていた心理士さんたちに、もっと十分に活躍していただきたいと、開業いたしました。

クリニックの壁に画家の小笠原まきさんから「ホスピタルアート」を描いてもらいました。その中に「ろうそくの木」があります。クリニックに来る親子は、様々な悩みと苦しさを抱えて受診します。子どもたちは、元気になると、後ろも振り返らずに、「じゃね」という感じでした。すた歩いて行きます。それでいいと思っています。たまに「寂しくないですか」と聞かれることがあります。寂しくないといえば、嘘になりますが、それは医者への感傷にすぎないと思っています。ただ、苦しくなって、振り返った時に、「ここで、ろうそくを灯していますよ」というメッセージになればいいなと思います。

こんな私ですが、どうぞよろしく願いいたします。